

赤い糸

闇の中で、二つの影が妖しく蠢いていた。

熱く火照って上気した私の体の上で、低くくぐもった声を漏らしながら動く影がある。

私が愛した男、私を愛してくれた男。

そして、限られたこのひと時だけは、誰にも邪魔されずに好きなだけ彼と一つに溶け合う事が出来る。

私にとっても、彼にとっても大切な時間。

いつしか、彼の動きは更に激しさを増し、それに突き動かされる様にして、私の中の淫らな欲望も頂点へ向かって急速に上り詰めてゆく。

瞬間、頭の中が真っ白になって意識が飛んだ。

きっと、彼の前だけでしか出せない様な、恥ずかしくもはしたない喘ぎ声をたくさん漏らしていたのだろう。

こうして、私と彼とのつかの間の逢瀬の時は、名残惜しくも呆気なく駆け足で過ぎ去ってゆく。

ずっと一緒にいられたら良いのに……。

そう思わないでもない。

しかし、それは今の彼にとっては過酷な要求であり、私は愛した男を困らせるような悪趣味な女ではなかった。

内心では、時々そうやって彼を困らせて、ほんのつかの間でも彼を弄んでみたい気がしない訳ではない。

でも、そんなに大胆な冒険に歩み出せるほど、私は度胸の座った女ではなかったし、何よりも彼に捨てられるのが怖かった。

彼は三十代半ばにして部長職を務める、将来を嘱望された若きエリートだ。

それに比べて、私はお嫁に行きそびれた三十路過ぎの、何の取り柄もないただのOLに過ぎない。

最近では『お局様』と陰で呼ばれるようになったとも、風の噂に聞く。

このまま何の楽しみもなく、ただ生きるだけの為に毎日家と会社を往復し、淡々と代わり映えのない時を重ねながら、ゆっくりとだが確実に醜く老いさらばえていくだけの人生。

たった一人で誰も頼る者がなく、孤独の寂しさに身を震わせながらも、なお先の見込みない無限の時を重ねなければならないという、出口のない独房に放り込まれたような人生に、一体何の意味があるのだろうか。

そんな、私にとっては無意味に時の経過を待つだけだった絶望の日々に、一筋の明るい光を与えてくれたのが彼だった。

きっかけは、何かの飲み会の席での酔った勢いだったと思う。

でも、そのおかげで、私は彼と一緒にの時を過ごせるのだし、彼は、私がこれまでに会った男達と違って、ちゃんと約束通りに私に逢いに来てくれて、心と体と全てで私を愛して

くれるのだ。

もう何人の男が私の前を通り過ぎて行っただろうか。

自分ではそれ程垢抜けているとも思えないのだが、学生時代から不思議と『彼氏』には困らなかった。

自分から告白した事は、この年になるまでとうとう一度もなかったし、きっとこの先は更にその見込みも薄くなるだろう。

でも、私の隣には大抵『彼』がいたし、何らかの原因で『彼』と別れても、それ程時間を置かずに次の『彼』が私の前に現れた。

私にとってはそれが当たり前だと思っていたし、自分がたった一人、部屋の片隅で涙に咽びながら孤独をかみ締めなければならなくなるなんて、当時は思いもよらなかった。

もう一つ、私にとっての不幸な現実とは、目の前に現れた『彼』の大半は、私の体が目的だったという事だ。

だから、私は『彼』に告白されて付き合い始めて、一緒の時間を重ねるにつれて『彼』への思いが深まった頃になると、大抵飽きられて捨てられる……そんな苦い経験の繰り返しだった。

私には分からないけれども、『男好きのする体だ』とは、かつて何人もの『彼』に言われた記憶がある。

だから、今の彼も、最初は『私の体が目的なのか？』と、密かな疑いを持っていたものだ。

しかし、そんな私も三十の声を聞く頃になると、一人で耐え難い孤独に打ちひしがれる日々が続いていたから、『体が目的でも良いから、一緒にいて欲しい』と言う気持ちもあって、彼との時間を重ねるようになった。

でも、彼は今までの『彼』とは違って、私の体だけを求めるのではなく、私の心も受け止めてくれた。

だからこそ、私には彼を困らせるような事は出来ない。

つかの間の熱く激しい絶頂のひと時が過ぎると、私は半ば意識を失ったまま、呆然と先程までの余韻に浸るのが好きだった。

そして、彼は大抵、私の意識がまだ朦朧としているうちに、優しくおやすみのキスをして出て行ってしまふ……それが普段の私の彼の間の暗黙のルールだった。

しかし、なぜか今日は、私の意識が元に戻るまで、彼は無言のまま静かに寄り添ってくれていた。

一緒にいてくれるのはとても嬉しいけれども、いつもの彼と違う……私にはそれが妙に気にかかった。

「どうしたの？ 今日」

「良いじゃないか、たまには」

「良いけど、何か嫌な事でもあった？」

「うっ、たまには、こういう気紛れをしてみたい時もあるさ」

「そう……」

きっと、彼には何か嫌な事か、悩み事があるに違いない……そう感じていた。

でも、彼が自ら言わない以上、あえて問いただしてもいけないと思った。

彼がどのような悩みを抱えているにせよ、それを聞いても私にはどうにも出来ないのだから、せめて彼が私の元にいる間は、彼の好きなようにさせてあげよう。

「それに……」

彼は再び私の上に覆い被さると、目の前の僅か十センチ先に、ちょっと悪戯っ子のように意地悪な笑みを浮かべる彼の顔があった。

オフィスでは決して見せる事のない、もう一つの彼の素顔だ。

「……今日は、もう少しお前を抱きたい気分なんだ。良いだろう？ 珠美（たまみ）」

一体、今日の彼はどうしちゃったんだろう？

そんな疑問が頭の隅を掠めつつも、私は反射的に無言のまま頷いていた。

少しでも長く彼と一緒にの時を過ごしたい……それは私の偽らざる本心だったから、彼からそう申し出てくれるのはとても嬉しかった。

私からは絶対にいえない、わがままなお願いだったから。

恥ずかしさの余り、私は静かに瞼を閉じると、私の唇に彼の唇が触れた。

＊

私は、オフィスの一角から、呆然と彼の姿を目で追っていた。

昨日までと全く変わらぬ様子で、職場の部下に様々な指示を出したり、机のパソコンを操作していたり、時には電話対応をしている彼。

職場にいる時の彼は、二人きりの時の彼とはまるで別人に見える。

私だけが知っている、彼のもう一つの素顔だ。

でも、そんな彼との二人きりの時を過ごす機会は、もう二度と訪れはしないのだ。

——彼とは終わったんだから、全て忘れよう。

幾ら自分にそう言い聞かせようとしても、気がつくと彼の姿を目で追いかけている自分がいた。

最初から、こうなる事は分かっていた筈だし、覚悟も決めていたつもり。

しかし、彼と二人で紡いできた時間が余りにも長かったものだから、いざその時が訪れてみると、なかなか受け入れられない自分がいる。

それは、昨日、私達が二度目の絶頂を迎えて、しばらくの間幸福の余韻に浸っていた時の事だった。

「俺達、今日で最後にしないか」

彼は、帰り間際におやすみのキスをする代わりに、そうやって話を切り出した。

「えっ？」

私にとっては寝耳に水だった。

私はあんなにあなたを愛して、あなたも私と同じ思いを、同じ時を共有していたと思っていたのに。

あなたを信じていたのに。

「最近、うちの奴に、ちょっと疑われているらしいんだ」

彼には、結婚して十年になるという奥さんがいた。

彼が言うには、奥さんに対する愛情はとうに失せたのだそうだ。

でも、恋愛感情とはまた違った、家族としての愛着のような意識は残っていて、離婚してまで私と一緒にいるつもりはないという。

それに、彼には二人の子供がいた。

子供の為にも、今の家庭を壊したくないと、彼はいった。

だったら、なぜあなたはあの時私を抱いたの？

どうして、三年間も私と付き合っていたの？

私の問いに、彼は答えなかった。

こんなに好きになってしまったのに、こんなに愛してしまったのに、今更別れてくれといわれても困る。

彼に奥さんがいるという事は、彼と付き合う前から知っていた。

だから、いつかはこんな日が来るという気はしていたのだ。

それでも、いつの間にか三年間もこの様な関係が続いてしまった事から、つい、これからはずっと二人で一緒にいられるのだらうと、自分で勝手に錯覚してしまっただけだ。

「ごめん」

彼に謝られた。

でも、謝られてもどうにもならないし、彼が私の元から去ってしまう事に変わりはないのだ。

彼には、『身勝手な頼みだけど、このまま黙って身を引いてくれ』と言われた。

きっと、私が逆上して、彼の家庭を滅茶苦茶にしてしまうのを恐れているのだと思う。

私はこんなにあなたを愛しているのだから、あなたが苦しんだり、悲しむような事をする筈がないのに。

「これで納得してくれるとは思わないけど……」

そういつて、彼は私に何がしかの慰謝料を支払うという話をした。

何だか、私が僅かばかりのお金の為に彼と付き合っていたと思われているみたいで、とても悲しかった。

私は、ただあなたが好きで、とても愛してしまっ、一緒にいて欲しかっただけなのに。

ああ、また一人きりになってしまう。

また、辛く苦しくも冷たい孤独の日々が、すっかり人肌の温もりに慣れきってしまった私の心を、跡形もなくズタズタに切り刻んでしまいうに違いない。

それに、別れた筈の彼と、毎日職場で顔を合わせなくてはならないのも、私に取ってはとても苦痛だった。

彼の姿が目に入れば、自分では意識していないつもりでも自然と目で追っているし、彼を見ていると、これまでの私と彼が過ごした日々の甘い思い出が甦り、逆に今の孤独感が助長されてしまうからだ。

私だけを見て欲しい。

私と一緒にいて欲しい。

幾らそう願っても、もう二度と叶えられはしないのだから。

結局、その日は一日中彼の姿を目で追いながら、自分自身の中で処理しきれない様々な思いのやり場に困りつつ、呆然としたまま終わった。

彼の姿が見える場所にいるのが辛くて、定時間が来るとそそくさと仕事を終わらせた。

だからといって、他にやる事がある訳ではない。

ただ生きるだけの為に夕食をとって、後はひたすら一人身の孤独に耐える辛い時間を過ごすだけだ。

まさかと思いつつも、念の為に銀行口座を確認すると、彼の名義で百万円が振り込まれていた。

手切れ金……と言う事なのだろう。

私は、最初からお金をもらうつもりなどなかったのだから、銀行口座も彼に教えていない。

きっと、経理の人間からでも聞きだしたのだろう。

一瞬、こんなお金はもらえない、彼に返そう……そう思ったが、やはり受け取っておく事にした。

今更彼に顔を合わせるのはとても辛かったし、私がお金を受け取る事によって、彼は『私との関係には一応決着がついた』と、多少なりとも安心出来るのだから。

彼にはもうフラれてしまったのに、それでも彼が傷ついたり、悲しませるような事はしたくない。

自分でもバカみたいだと思うけれども、それでも私は彼をこんなに好きなのだから、急にその思いを変えられる筈がない。

そのまま、私は自宅に戻っていた。

わざわざ夕食を作る気力も失せてしまっていたので、帰りがけに寄ったコンビニで買ったパンで間に合わせた。

こんな食事を続けていたら、きっと偏食の余り病気にでも罹ってしまいそうだが、今はむしろ不治の病魔に蝕まれて、いつまで続くのか見当もつかない無限の孤独な境涯を早く終わらせて欲しいとさえ、密かに願ってしまう。

一人で家にいても寂しさが募る一方だったし、会社に行っても彼の姿が目に入ってしまう。

かといって、他にすべき事もなければ、行きたい場所もない。

私の事なんて誰も気にしていないし、私がどうなろうと誰も心配する訳じゃない。

このまま私が息絶えてしまっても、いきなり消え失せてしまっても、誰にも気付かれは

しないし、誰にも気にかけてはもらえない。

まるで、端から私などこの世には存在していなかったように、誰の記憶の片隅にも残らない。

孤独って、そういう事だ。

長い間孤独の中に身をおいていると、いつしか孤独である自分に慣れてしまって、自分の領域に他人が踏み込む事に耐えられなくなる……世の中にはそういう類いの人がいるらしいが、私には無理だ。

一人きりは嫌。

でも、幾ら自分がそう望んでも、私を好いてくれて、私を頼りにしてくれて、私を必要としてくれる人が現れない限り、決して叶えられる見込みのない儚い願いに過ぎない。

少なくとも、冷たく薄暗い部屋の片隅で、一人小さく縮こまって身を震わせていても、新たな出会いなど絶対に訪れない事だけははっきりしている。

しかし、今は新たな出会いを求めて外へ出るなど、とても出来る心境ではなかった。

一週間にたった一度、ほんの数時間、それも私の部屋の中だけという限られた空間でしかなかったけれども、私にとってはとても貴重な時間だった。

今になってみれば、私が彼を一方的に愛してしまっただけで、彼は仕事や家庭におけるストレスを処理する為に、私をつかの間の癒しの為の道具として利用しただけなのだという事が分かる。

元々、彼と私では釣り合いが取れていなかったのだし、不倫と言う道徳的に許されない関係でもあった。

この様なオチでもなければ、彼と親しげに言葉を交わしたり、ましてや彼と肌を重ねるなどあり得なかったに違いない。

とても悲しいけれども、それが現実なのだ。

そして私は、世間の厳しい現実には幾度となく翻弄され、裏切られ、身を引き千切られる思いを重ねて、それでも懲りずに同じ過ちを繰り返す、バカな女。

自分の中でも、どこか客観的で冷静な自分が常にいて、目の前に現れる男達に良いように弄ばれつつ、それでも一緒にいてくれる人を求め続ける私に、いい加減呆れ返っているのだ。

でも、幾ら騙されても、悲しい思いを積み重ねても、ずっと一人きりでいるよりは遥かにマシ。

誰にも振り回られずに、誰にも顧みられずにいるくらいなら、例え相手が『私の体目当てだ』と予感していても、きっとその人の思い通りにさせてしまうだろう。

そして、これまで私の前を通り過ぎた男達は、誰もが皆例外なく一時的に私の体を求めただけで、しばらくすると私の元を離れていった。

幾ら私が男達にそれ以外のものを求めても、決して与えられはしなかった。

私には、ほんのつかの間だけ『彼』の温もりを感じる事で、一人っきりの寂しさを紛らわせる事くらいしか出来なかった。

そしてまた、過去に幾度となく繰り返した悪しき事例同様に、私は呆気なく捨てられてしまった。

捨てられれば酷く傷つくのは分かっていた筈なのに、どうしてもこの忌まわしき悲しみの連鎖を断ち切る事は出来なかった。

ほんのつかの間の、まやかしの温もりと充足感に心を奪われてしまった為に。

一人きりでも孤独に立ち向かうという、ほんの少しの勇気を持ち合わせていなかった為に。

もうこんな思いは嫌！

そう思う反面、きっと又捨てられると分かっているのに、一緒にいてくれる人が欲しい、私の冷え切ってしまった心を温めて欲しいと願ってしまうのだ。

なぜなら、この殺伐とした世界を一人で渡り歩いて行けるほど、私は強くはないから。

一人きりでは何も出来ない、呆気なく崩折れてしまう弱々しい一人の女に過ぎないのだから。

いっその事、この際世間の荒波にもがき苦しみ、それでも何とかしようと無駄な足掻きを繰り返すよりは、全てを諦めてしまった方が楽なのかもしれない。

私にとっては、この世界は余りに荒々し過ぎて、無事に乗り越えられそうな気がしない。

そうと分かっているのだから、予め想定された悲劇の結末へ向けて再び歩みを進める位なら、この果てしない苦悩のゲームから降りてしまった方が、私自身にとっては良いのかもしれない。

選ばれたゲームの勝者のみに与えられる、惜しみない祝福と栄光の日々を手にする機会が永遠に奪われるが、少なくともゲームに敗退して無残に傷つけられる心配からは開放される。

それは、未来への希望も、明日への期待をも諦める事に他ならなかったが、決して報われぬ期待に裏切られて傷つくよりは遥かにマシだろう。

どうせ、これまでずっと人生という名のゲームに負け続けてきた私なのだから、これ以上に何を期待すれば良いのだろうか？

何に希望を見出せばよいのだろうか？

何だかとても疲れてしまった。

何をするのも、何かを考えるのも、深い悲しみと孤独の寂しさに打ちひしがれるのも、全てが嫌になってしまった。

ここで全てを投げ出して、このまま永遠に消えてしまう事が出来たら、どんなにか楽なのだろう。

どうせ私一人がこのままこっそり姿を消してしまっても、この世界には気にかけてくれる人のたった一人でさえ存在しないのだから。

*

次に気がついた時、私は真っ白な天井を呆然と眺めていた。

そこは病院のベッドの上だった。

自分自身の記憶は微塵も残されてはいないのだが、カッターで手首を切って倒れていた所を、たまたま私の自宅を訪れた同僚に発見されたのだそうだ。

そのまま放っておいてくれれば良かったのに……そう恨めしく思わないでもなかった。

でも、こんな私の事を気にしてくれる人がまだいたんだ……と、少しだけ嬉しく思わなくもなかった。

私は会社を四日間無断欠勤し、不審に思った上司が、五日目の朝に私の様子を見に同僚を派遣した……のだそうだ。

私を心配してくれたといっても、個人的に気になったという訳ではなくて、あくまでも職務上の都合に過ぎなかったのだ。

と言う事は、私は四日間も飲まず食わずで、一人部屋の片隅に蹲って茫然自失の状態だったのだろうか。

そして、次第に意識が混濁する中、手っ取り早く全てに決着をつけようと、自らの腕に刃物を立ててしまったのだろうか。

結局、手首の傷は軽症程度だったのだが、極度に体力が衰えているという事で、そのまま三日間を病院で過ごしてから退院した。

自宅に戻ると、そのまま会社に連絡を取り、今回のお礼とお詫びの言葉を淡々と述べ、続けてそのまま会社を辞めたいという意思を伝えた。

もう二度と、あのオフィスに足を踏み入れたくはなかった。

電話越しの上司は、とても戸惑ったような、厄介事を押し付けられて迷惑といった雰囲気垣間見せていたが、渋々ながらも後の処理を全て引き受けてくれた。

でも、私にとっては今やどうでも良い。

どうしても好きなようにして欲しい。

こうして電話を入れたのだから、このまま何も告げずに音信不通になるのでは、余りに失礼だと思ったからだ。

引き続いて、この部屋の管理会社に連絡を取り、今日付けで部屋を引き払うこと、荷物を残していくが処分して欲しいなどの意向を伝え、先方の返答も聞かずに電話を切った。

これで、私には帰る場所もなくなってしまった。

余計な物を残していると、返って未練が生じて自分の決意が揺らぐから、私がこの世界に存在していた痕跡を全て消し去った上で、私自身も永遠に消えてしまうのだ。

そうすれば、何もかもがなかった事になる。

始めから私など何処にも存在してはいなかったのだ。

私は、そのまま呆然と部屋を後にした。

刃物で自分を傷つけるのではダメだ。

いざとなったら躊躇ってしまうし、痛いのも嫌。

それに、今回同様に失敗して、また病院のベッドの上で目覚める……と言う結末になりそうな気がした。

もっと確実に、絶対に失敗しないで、この世界から永遠に消えて無くなれる方法はないものか。

私はフラフラと、夜の町を彷徨っていた。

夜の繁華街は、多くの人々が行き交っていた。

二人っきりの甘いひと時を楽しもうと、周囲に見せ付けるように寄り添っている恋人達。

仕事の憂さを晴らそうと、酒の力を借りてつかの間の宴に興じるビジネスマンの一団。

今日の金づるを自分の店へと勧誘するのに忙しい、街角に立つ客引き達。

この町に引き寄せられてくる全ての者が、自らの浅ましい欲望を一時的に満たすだけの為に、ごみごみした騒がしい歓楽街に夜毎繰り出してくるのだ。

あんな風にバカ騒ぎして、例え一時的にせよ嫌な事を全て忘れられる人達が羨ましい。

私にももう少し要領の良さがあれば、今より多少はマシな状況にあったのかもしれない。

でも、自分の生まれつき持っている性格や、過去に起こった出来事を今更後悔しても、私を取り巻く環境には些かな変化も生じないのだし、未練を感じる自分自身の姿に情けなさが込み上げるだけだ。

私は無駄な抵抗を諦めて、全てに決着をつけると決めたのだから。

生気の欠如した虚ろな表情のまま、私は人波を掻き分けながらあてどもなく彷徨っていた。

それからどの位の間、繁華街の雑踏に流されたのだろうか。

気がつくやうと、とあるビルの屋上から、煌びやかなネオンに彩られた町並みを呆然と眺めていた。

上から足元に広がる夜の町を見下ろすと、階下に蠢く無数の人影は、さながら今日の餌場へ我先にと密集する蟻の集団のようにも見える。

視界を転じて、少し離れたネオンの轟く表通りには、卑しくも浅ましい欲望に飢えた夜の獣達が、生まれ着いての本能の赴くまま、つかの間の悦びを得る為に右往左往しているのだろうが、妖しげに明滅するネオンの光が全てを押し隠していた。

真っ暗な夜の町を彩るネオンの灯りの下で、今日は何人の男と女の喜怒哀楽の即興劇を繰り広げるのだろうか。

でも、私にとってはもうどうでも良い事、私とは関係のない事だ。

私はもうすぐ消滅してしまうのだから。

最初から存在しなかった事になってしまうのだから。

ここからたった一步踏み出せば、ほんの二十センチ前に進めば、私はいとも呆気なく夜の闇に飲み込まれて、一瞬の激痛と共にこの世界から消えて無くなれるのだろう。

地面に叩きつけられる瞬間には、私は既にこの世界の住人ではなくなっているのだから、もしかしたら瞬時の激痛を感じる余裕さえないのかもしれない。

それに、こうして上から地上を覗き込んでみると、とても怖くて足が竦んでしまうにも

拘らず、反面、何処までも吸い込まれてしまいそうな、その先には私達の思いもよらない不思議な世界が待ち構えているような気がして、頭から飛び込んでみたい衝動に駆られるのだ。

それは、自分の存在を消してしまう事に対して、決意を固めた筈の私の心のどこかにも、未だに躊躇いの気持ちが燦っているからなのだろう。

誰だって、自分を消してしまうのは怖い。

自分が始めから居なかった事にされてしまうなんて、耐えられないと思う。

でも、自分が望むと望まざるとに関わらず、既に私は生きながらにして無き者にされているという、余りに過酷な現実があるのだ。

私の存在を決めるのは、私自身ではない。

私の存在を求め、必要としてくれる第三者なのだ。

私が例えここに存在していても、周囲の誰もが私に関心を示さずに、たった一人で取り残されているならば、それでも果たして『私はここにいる』と言えるだろうか？

誰にも気付かれず、誰の意識にも残らないなら、私を取り巻く全ての人にとって、私は存在しないも同じなのだ。

しかし、現実にはこうして存在しているのだから、私自身と周囲の認識のギャップが限りなくかけ離れてしまう。

私には、周囲に多くの人がいながら、自分が端から存在していないような扱いを受ける事には、もうほんの一瞬でも耐えられないのだ。

だから、周囲の人々が私の存在を端から認識していないのなら、私がそれに合わせるしかない。

自分でも、心臓がドクドクと波打っているのが分かる。

これまでに体験した事のない新しい世界へ踏み出すのだから、緊張しているのか、興奮しているのか、未知なる恐怖に打ち震えているのかのどれかだろう。

自分自身でも、今の気持ちを正確に表現する事はできない。

——私は、もうすぐ消えてなくなってしまうのだ。

いつの間にか、一筋の涙が頬を流れ落ちていた。

私の様々な思いがこもった涙、私がこの世界に残した最後の未練の結晶だった。

もう迷わない。

私の進むべき道は、ここからたった一歩先にあるのだから。

頬を伝う涙に乗せて、この世界に対する僅かばかりの惜別の念を洗い流すと、一度深く深呼吸をして、静かに瞼を閉じた。

＊

俺は眼前に迫り来る人波を掻き分けつつ、夜の町をあてどもなく彷徨っていた。
もう、俺にはどこにも行き場所が無くなってしまった。

きっかけは俺の些細な判断ミスだったとはいえ、仕事を失い、妻と子供には逃げられ、多額の借金を抱えてしまった。

拳銃に、闇の世界の狙撃手（スナイパー）達に追い立てられて、俺は夜の町の人込みに身を隠していた。

幾ら、狙った獲物はどこまでも執拗に追いかける執念深い狙撃手どもといえども、夜の繁華街に轟く無数の人波の中から、たった一人の哀れな獲物を見つけ出すのは、かなり骨が折れる作業に違いない。

だが、そうして毎日を怯えながら追手の追跡を逃れるだけの生活には、いい加減嫌気が差していた。

このままでは先の展望が見込めないし、例えこのまま奴らの追跡を交わせたとしても、既に俺には何も支えになるものが残されていない。

いっその事、このまま諦めてしまおうか……と、弱気になった事も一度や二度ではない。

しかし、その度に妻と子供の顔を思い浮かべて、『何とかしてこの苦境を抜け出したら、もう一度最初からやり直そう』と、自らの弱気を強引に封じ込めてきたのだ。

昨日、妻の元へ顔を出した。

と言うよりも、子供の顔を見に行っただけ。

だが、子供との面会を妻にはっきりと拒絶された俺は、そのまますごすごと退散するしかなかった。

余り執拗に俺が付きまとっていると、いずれ狙撃手達が妻の元を押し寄せないとも限らないからだ。

これまでも散々苦労をかけてきたのに、これ以上に迷惑をかける訳には行かない。

俺は渋々ながらも妻との離婚を承諾し、少なくとも借金絡みの騒動にカタがつくまでは、子供にも一切近づかないと固く誓わされた上で、妻だった女の元を後にした。

決して俺が望んだ結末ではないが、今の状況を考えれば、俺に選択の余地はなかった。

そして、俺は再びこの町に戻ってきた。

なぜここに舞い戻ってきたのかは分からない。

多分、長年住み慣れて愛着も湧いていたから、無意識のうちに自然と足が向いたのだと思う。

嫌な思いもたくさんしたが、その分懐かしい思い出もたくさん刻んだこの町だ。

しかし、これまでに自分の手にしていた物が全て奪われてしまうと、むしろやり場のない虚しさだけが込み上げてきて、今まで俺を支えてきた思いが跡形もなく崩れ落ちてしまう。

もう、どうでも良いや。

そんな、投げやりな気分になる。

いっその事、全てを終わらせてしまおうか、何もなかった事にしまおうか……とも思う。

確か、俺名義の生命保険が、まだ解約されずに残っていた筈だ。

受取人は妻の名義になっている。

これまで散々苦勞をかけた罪滅ぼしに、せめて当面の生活の糧となる物くらいは残してあげようか。

今の俺には、この程度の事しか出来はしないのだから。

半ば本気に、しかし、半ば冗談半分に、俺はとあるビルの階段を登っていた。

こういった建物の屋上は、飛び降り自殺などの突発的な事故を予め防止する為に、屋上への扉は塞がれているものだと思っていた。

現に、全国で年間に三万を超える自殺者がおり、もし自分の建物でその様な縁起の悪い事件がおきたら……そう考えるビルの家主だって、結構いるのだろう。

つまり、自分の貴重な財産の価値を、意図せずに降って湧いた災厄によって痛めつけられないように、予め自己防衛しておくという事だ。

——もし、仮に屋上へ辿りつけたら、その時はその時だ。

そんな、ある意味現在の状況には似つかわしくない感情を内に秘めつつ、俺は淡々と階段を登りつめて行った。

屋上へと通じる扉は、半分ほど開いたままになっていた。

俺はそのまま、目に見えぬ何者かに背中を押されるようにして、些かの戸惑いもなく屋外へと踏み出した。

色とりどりのネオンサインに彩られた夜の町は、まさに不夜城と呼ぶに相応しい様相を呈していた。

表通りから少々外れたこのビルの屋上にまでも、自分に都合の良い思惑を抱えた群衆の喧騒が、微かに耳元まで届いている。

——こっちは生きるか死ぬかの重大な岐路に立たされているというのに、全くお気楽な連中だ。

自分がおかれている状況とは全く相容れない、階下に轟く喧騒の出所に向かって、一人小声で毒づいた。

しかし、特に苛立つという感じではなく、むしろ呆れ返ったようなニュアンスだ。

俺だって、一年前の今頃には、階下に轟く人波に紛れてつかの間の癒しを求めていた口なのだから、他人の行為にとやかく言える立場ではない。

だが、きっとこれから一年も経てば、あの騒がしい群衆の中からも俺と似通った立場に追い込まれる者も現れるのだろう。

せいぜい、楽しみたい時に出来るだけ楽しむが良い。

そのうち、自分の意思とは関わりなく塗炭の苦しみを存分に味わう事になるのだから。

こんな皮肉めいた考えが頭に上るとは、俺も随分と人が悪くなったものだ。

表向き善人面をしてシレッと済ましている連中の、普段はひた隠しにしている嫌な部分、汚らしい部分を散々目の当たりにしてしまうと、大なり小なり人間の性格は歪んでくるらしい。

——そんな奴がいつまでもしぶとく生きながらえてちゃ、世の中も良くはならないよな。

そんな具にもつかない考えが、ひょっこりと首を擡げる。

まるで他人事のように落ち着き払っている自分が、逆にどこか恐ろしかった。

ここが俺の最後の舞台になるのも、悪くないかもしれない。

様々な欲望の坩堝と化した繁華街から僅かに外れた暗闇の中なんて、明るい日の光を求めて散々足掻いて見せても、結局土埃に汚れた薄汚い地面に這い蹲って生きるしかない俺にとっては、まさに打ってつけの幕切れといえよう。

未練がましい行いはやめよう。

こういう事は勢いが大切なからだ。

俺が意を決して、それ程広くはない屋上のスペースの先の一点に視点を集中した時、薄暗い影が微かに蠢いたような気がした。

「ちょっと……」

見間違いではない。

確かに人影だ。

心地良くそよぐ風に長い髪の毛をはためかせながら、人影は階下に視線を落としていた。こんな時間にこんな所で、ぼんやりと階下を見つめているなんて、これから飛び降りるに決まっている。

——馬鹿が、何やってるんだか。

「ちょっと待てよ！」

俺は慌てて人影に駆け寄ると、背後から腕を回して抱え込み、そのまま背中から床に倒れこんだ。

「離して、離して！」

俺の拘束を振り解こうと、人影はもがきつつ叫び声を上げるが、絶対に離すものか。

人影は明らかに女性だった。

その声といい、体つきといい、男にはない特有の女性らしさを醸し出していた。

俺もそれ程頑強な体つきではなかったが、女性一人を力尽くで組み伏せるくらいは造作もない。

が、女はなおも俺の拘束を振り解こうと、手足をバタつかせて必死の抵抗を試みる。

何があったかは知らないが、俺の目の前で飛び降り自殺なんかされた日には、一生悪夢に魘されそうだ。

「馬鹿、何考えてるんだ！ 自殺なんてするんじゃない！」

全く、つい今しがたまで俺も同じ事を考えていたのに、よくも偉そうにいったものだ。

とはいえ、この非常時に些細な事を気にしている余裕はない。

俺は冷たいコンクリートの床に転がったまま、背後から女の体に腕を回して、更にきつく抱きかかえた。

「離して！」

なおもしつこく抵抗を試みる女に対して、俺は反射的に言い放っていた。

「お前が馬鹿な考えをやめるまでは、決して離すものか！」

それからどのくらいの時間がたっただろう。

女は次第に無駄な抵抗を諦め、冷たいコンクリートの床に身を横たえて、背後から俺に抱きかかえられたまま、小さく肩を震わせて泣きじゃくっていた。

とりあえず、今手を離しても衝動的に馬鹿な事をする心配はなさそうだ。

俺は静かに女の体に回していた腕を解くと、なおも冷たい床に寝転がったまますすり泣いている女の顔を覗き込んだ。

「急に抱きついたりして悪かったな。もう、自殺しようなんて馬鹿な考えはやめる事だ」
全く、良くも抜けぬけと善人面が出来るものだ。

これでは、俺が最も嫌悪する連中の同類みたいじゃないか。

「さあ、立てるか？」

俺が何気なく女の鼻先に手を差し伸べると、女は頬を涙に濡らしながらも泣く事を止め、呆然とした表情のまま上半身を起き上がらせた。

幾ら薄暗いビルの屋上でも、上半身を起き上がらせれば、町のネオンの灯りが微かにここまでも届く。

俺は、これまで薄暗い陰に隠されていた女の顔を見て、思わず息を呑んだ。

とても綺麗な女性だった。

＊

目の前の男の人が誰なのか、私にはわからなかった。

でも、私が決死の覚悟で臨んだ行為を、呆気なく制止されてしまった事だけは明らかだった。

なぜ止めるの？

見知らぬ相手の素性よりも、まずその疑問が頭に浮かんだ。

せっかくやっと決心がついたのに、このような形で押し留められてしまっては、またしても余計な未練や躊躇いが生じてしまう。

私はもうこの世界には必要のない人間なの。

いえ、最初から存在すべきではなかったのに……。

背後から彼にきつく抱きかかえられながら、私の心のうちには様々な思いが怒涛の荒波となって際限なく打ちつけ、いつしか瞼を伝って流れ出していた。

私だって、本当はこんな形で消えてしまいたくは無い。

でも、もう寂しいのは嫌なの。

一人きりは耐えられないの。

二度と傷つきたくは無いの。

しかし、このような形で中途半端に私を引き止められても、再び先の見込めない絶望の日々を延々とこの身に刻み付けなくてはならないのだ。

あなたがどのような思惑で私の邪魔をしたのかは分からないけれども、私にとってはこ

のまま消えてしまった方が遥かにマシだったのに。

でも、私はあなたに助けられてしまった。

いえ、この場合には、助けられたと言う表現は相応しくはない。

ああ、私はこの人の余計なお節介のせいで、また辛く悲しい日々に戻りしなくてはならないのだろうか。

私は、こんな時になってまで、どうしてこれ程までにツキがないのだろうか。

私の前に現れる男は、いつだって誰だってそうだった。

最初は甘い言葉で近づいてきて、私を散々弄んだ挙句に、本気になってしまって後戻りの効かなくなった私の心を情け容赦なく土足で踏みにじり、使い古しの襤褸切れのように捨てられてきた。

そして、いつでもそういう結果になる事は分かっていたのに、つかの間だけでも一緒にいて欲しいばかりに、男達のいうがままに従ってきた私も同罪だ。

「さあ、立てるか？」

私の意図に反して助けてくれた彼は、どことなく躊躇いがちにではあったが、静かに私の目の前に手を差し伸べてくれた。

一体この人はどういうつもりなのだろうか。

私はよろよろと上半身を起こして、目の前に腰を屈めて私を覗き込む顔を仰ぎ見た。

私よりは何歳か年上なのだろうか。

元々がのっぺりとした顔立ちの、余り風采の上がるタイプではなかったが、それに加えて痛々しいほどに疲れきった表情を、無理に引きつった笑顔で覆い隠していると言った印象だった。

見た目の第一印象としては余り良いものではないが、個人的には彼に対して余り嫌なイメージは抱かなかった。

「なぜ、私を放っておいてくれなかったの？」

「なぜって、自殺しようとしている奴を目撃したら、誰だって放って置ける訳ないだろ？」

そんな下らない理由で私の決意を妨げたと言うの？

今この時を逃してしまったら、一度固まった決意も揺らいでしまって、再び孤独の悲嘆に咽ぶ日々へ戻りしなくてはならないのに。

「とにかく、こんな所にいたらダメだ。お願いだから、一旦下に降りよう」

「嫌！」

私は反射的に返していた。

そして、よろよろと力なく彼の足元にすがり付いて、喉の奥から込み上げる嗚咽を押し殺しつつ、彼に懇願した。

「私を見捨てないで、一人にしないで！」

きっと彼に促されるままに下へ降りてしまったら、私はそのまま置き去りにされる。

たった一人で、行く場所もなく、絶望の淵に片足を埋めたまま、尚永遠の時を彷徨わな

くてはならない。

今の私には、消えてなくなってしまうより辛いそんな現実には、とても耐えられません。

彼は、酷く困惑し、途方に暮れた表情のまま、しばらく私を見下ろしていたが、やがて観念したといった風に膝を折り、足元に縋りついたままの私の手を取った。

「わかった、わかったから。俺はあんたの事を何も知らないし、例え知っていても何もしてやれる事はないけど、どうしてこんなバカな事を考えたのか、話を聞いてやるくらいは出来るから。もしそれであんたの気が少しでも治まるなら、話してみるといい」

彼は、再び屋上のコンクリートの床に腰を降ろして、私の鼻先に耳を傾けてくれた。

私は、この時とばかりに、自分が思う事、体験した事、これまでの何人もの『彼』に対して言えなかった事を、今し方出会ったばかりの彼に対してとうとうとまくし立てていた。

これまでに私を捨てていった何人もの『彼』に対してはいえなかった思いを、出会ったばかりの目の前の彼は受け止めてくれた。

いや、心の底ではどう思っているのかなんて、私にはわからない。

年甲斐もなく、なんて傍迷惑な女だ……と、半ば呆れ返られていたのかもしれない。

でも、とにかく私の話到最后まで耳を傾けてくれようと言う姿勢が、今の私にはとても嬉しかった。

それに、どこの誰ともわからない彼を引き止めるには、とにかく話を続けるしかなかった。

少なくとも、彼は悪い人ではなさそうだったし、一人きりになりたくはなかったからだ。

それが自分のわがままだという事は重々承知している。

でも、せめて一晩くらいは、いえ、ほんの一時間でよいから、一人で置き去りにされたくはなかった。

「そうすると、珠美さんにはもう帰る場所もないのか？」

「そうですね。私はこのまま消えてしまうつもりで、後腐れを無くす為に全てを処分してきましたから」

「親兄弟とか、頼れる身内は？」

「肉親は一人も……。遠縁の親戚がいると言う話を聞いた事はありませんけど、私は一度も会った事はありませんし、連絡先も分かりませんので……」

「じゃあ、これからどうするんだ？」

「私にとっては、このまま一人で生きていくのは辛過ぎますから……」

「だから、バカな事考えるなって……だったら、あんたも疲れているだろうし、嫌じゃなければ家に来るか？」

「でも……」

「別にとって食う訳じゃないさ。ただ、このまま放っておいたら、またあんたは妙な考えを起こしそうだから」

「いえ、その、ご迷惑じゃないんですか？」

「今は、そんな他人の迷惑とかを考えている場合じゃないだろう？ 本当は、俺の所も

少々厄介事を抱えてるから、出来れば別の所を頼った方がいいだろうけど、他に行き場所がないならしょうがないじゃないか」

＊

彼の抱えている厄介事とは、お金にまつわるトラブルのようだった。

余り綺麗とはいえないアパートの扉には、金融業者の物と思える書置きがこれ見よがしに貼り付けられていた。

そこには脅し紛いの誹謗中傷の文句が書き連ねられており、借金の取立ての厳しさを思わせた。

——やはりお邪魔してはいけなかったのだろうか……。

ふとそんな思いが頭をよぎったのだが、こうなってしまったのも元はと言えば私のわがママが原因なのだ。

それに、今の私には他に頼れるものが何もない。

「ははっ。ちょっと恥ずかしいものを見られたけど、まあ、そういう訳だ。もし奴らが来たら騒がしくなるだろうが、一晩くらいは我慢してくれよ」

彼は扉に貼り付けられた書置きを剥がして丸めると、私を部屋へ招き入れた。

戸口を潜ると同時に、室内の澁んだ空気が鼻を突く。

本当は窓を全開にして空気を入れ換えたい所だが、現在彼の置かれた状況を思えば、自宅に戻った所を周囲に気取られたくはないだろう。

彼は慣れた様子で灯り一つない室内に入り、座卓の隅に何気なく置かれているスタンドライトの電源を入れる。

決して広くはない一室を照らし出すにしても、そのスタンドライトでは余りにも非力だったが、彼は天井に据え付けられている照明の電源を入れようとはしなかった。

私は何とはなしに居心地の悪さを感じつつも、反面何もかもを明るく照らし出されて、先程まで散々泣き腫らした無様な素顔を彼の目に晒したくはないという思いもあって、勧められるままに座卓の脇に腰を下ろした。

「何か、飲み物でも飲むか？」

「ありがとうございます」

私は反射的に答えるが、別に飲み物などどうでも良かった。

一体、彼はどういうつもりで私を自宅に招き入れたのだろうか？

——他に行き場所がないならしょうがないじゃないか。

彼はそういった。

別に知り合いでもない私がどうなろうと、彼にとっては何の関係もない筈なのに、わざわざ私を泊めてくれようと言うのだ。

彼にしてみれば、偶然にも私が命を失おうとした現場を目撃してしまった為に、このまま放置して再びバカな行為に及ばれては寝覚めが悪い……と言う事なのだろうか。

それとも……。

彼が目の中の非力なスタンドライトしか点けない理由は、多分苛酷な取立ての金融業者に自分が帰宅した事を気取られたくないからなのだと思う。

でも、この薄暗い部屋の中で男と女がたった二人きりで置かれれば、もっと別の密かな目的があるのではないかと、つい勘繰ってしまう。

別に彼がそれを望むのならば、私にはそれを拒むつもりはない。

せっかく一夜の宿を提供してくれるのだし、私もたった一人で夜を過ごすのは耐えられそうになかったから、その対価として私の体を求められれば、きっと嫌とはいえないと思う。

それに、今日は思いがけなくも彼に引き止められてしまったが、きっと一晩眠って気分を入れ替えれば、明日もう一度決意を固める気にもなるだろう。

そうだとすれば、明日のうちに消えてなくなってしまうのだ。

最後の夜を男の人の腕の中で過ごせるなら、例えその相手が誰であれ、私の人生の幕切れに相応しい思い出になるのかもしれない。

「あの、一人でお住まいなんですか？」

私を招き入れた彼の意図を探るべく、とりあえず当たり障りのない話題から会話を始める事にした。

「ああ、今のところは……」

それはそうだろうと思う。

でなければ、今日出会ったばかりの私をいきなり自宅へ招き入れる筈がない。

でも、何となく微妙に違和感の残るニュアンスを帯びた答えだ。

「見ての通り、借金がらみのトラブルを抱えていたから、とうとう妻と子供にも愛想を突かされたって所だ」

そのまま、何となく話の流れで彼の身の上話を聴く事になってしまった。

彼は小規模ながらも会社を経営していたのだそうだが、仕事上のトラブルから多額の負債を抱えてしまった。

たった一度のトラブルの為に、それまでに蓄えた資産を全て失い、金融業者からの過酷で執拗な取立てに遭い、彼の奥さんは子供を連れて家を出てしまったのだという。

そして昨日、正式に奥さんと離婚した……。

私は、彼の一人語りに時折頷きながら耳を傾けていた。

彼の酷く疲れ切ったような、笑みを零していてもどこか苦勞の痕が滲み出ているような複雑な表情は、きっと彼のそういった経験が色濃く影響しているのだろう。

そんな彼に対して、私はなんとわがままな振舞いをしてしまったのだろうか。

確かに私だって、あれ程までに深く愛してしまった彼に裏切られて、全てに絶望してしまったのだし、この先ずっと一人きりでいる事には耐えられなかった。

あの時の私は、それこそ自分一人が世界中の全ての不幸を背負っている様な悲哀を感じていた。

でも、そんな私よりも彼の方が何倍も辛い経験をしているのではないだろうか。

心ならずも愛する妻と子から遠ざけられ、更に過酷な借金の取立てに追われる日々では、きっと気の休まる暇もないだろう。

よりによって、私はそんな彼にわがままを言い、甘えてしまっているのだ。

そう思うと、私は彼に対してとても申し訳ない思いで一杯になった。

「こんな話をしても面白くないだろうし、あんたも疲れているだろうから、そろそろ寝た方がいい」

「あの、あなたもとても大変な時なのに、今日初めて出会ったばかりの私が、この様なわがままを言ってしまうって申し訳ありません」

「そんな事は別にいいんだ。それよりも、もう二度とバカな考えは起こさない様にな。あんたみたいな綺麗な人だったら、まだ幾らでもやり直せるんだから」

彼がどのような意味で言ったのかは分からないが、私にとっては複雑な心境だった。

かつて私の前に現れた男達は、どんな女に対しても『綺麗』と心にもないお世辞を言って回って、私をその気にさせた挙句に散々弄んできたのだ。

そんな見え透いた言葉を真に受けて、その気になってしまう私の非もあるのだが、私はそういった幾つもの経験を通じて、男が女に対していう『綺麗』『可愛い』という言葉は、大半が心にもない社交辞令に過ぎないということを学んだ。

そして、甘い言葉と共に近づいてくる男は、大抵が良からぬ下心を内に秘めているのだ。

もちろん妙な下心を持っている訳ではなくて、本心からそう思ってくれるのなら素直に喜べるのだが、私の前に現れた男は例外なく本心を甘い言葉で包み隠しているだけだった。

彼が私を抱きたいなら素直にそういえばいいし、今の私に拒むつもりはない。

でも、心にもない言葉で私を騙して弄ぶつもりなのかと思うと、何だかとても悲しかった。

「俺が普段使ってる布団で悪いけど、あんたはこれを使ってくれ」

「あなたはどうするんですか？」

「俺の事は気にしないでいいって。寒さに凍える季節でもないし、その辺で横になってればいいんだから」

彼の言葉に、何だか申し訳ない気がした。

別に良からぬ下心を秘めている訳ではないのだろうか？

いや、もしかしたら私の寝込みを襲うつもりなのかもしれない。

素直に言ってくれれば拒否するつもりはないのに、最後の夜に強引に襲い掛かれるのでは、何だか男に弄ばれるばかりの私の人生を象徴しているみたいで、とても悲しい。

でも、彼もとても辛い思いをしているのだし、その上私がこのような迷惑をかけているのだから、今夜くらいは彼の思うようにさせてあげた方がいいのだろうか。

例え彼が私をどの様に扱おうと、明日になれば私は消えてなくなってしまうのだから。

そんな私の身勝手な思い込みをよそに、結局彼は私に指一本触れることなく眠り込んでしまった。

＊

結局、私はそれ程広くはない彼の部屋に二人きりでいたにも拘らず、特に襲われる事も、肌を重ねることもなく朝を迎えた。

私に魅力がないのだろうか……とか、内気な人で手を出せなかったのだろうか……とか、やはり単純に迷惑だったのだろうか……などと思いを巡らせたが、今日で消えてしまう私にとっては最早どうでも良いことである。

一夜の床を提供してくれたお礼にと、私は朝食を作って彼に振舞う事にした。

冷蔵庫にはろくな食材が入っていなかったが、間に合わせで何とか朝食らしい見栄えは整えた。

彼にとっては久しぶりに作りたての温かい朝食だったようで、慎ましいメニューだったにも拘らず喜んでくれた。

朝食が終わると、早々に彼の自宅を後にする。

昼間は金融業者の取立てに遭遇する可能性が高いので、彼も家にいる事は多くないという。

そのまま彼と別れて、私は一旦自分の部屋へ戻った。

管理会社には昨日のうちに退去する旨を通告してあったのだが、昨日の今日ではまだ手をつけられていないだろうと思ったからだ。

自分の部屋と彼のアパートは、意外と近い所にあった。

三十分ほど歩いて自宅に辿りつくと、まずシャワーを浴びた。

昨日は半ば衝動的に家を出てきてしまったが、電気ガス水道なども退去の通知をしなくてはと思い立ち、そういった手続きを電話で済ませて、部屋の鍵も管理会社に郵送で送ることにする。

そして、一通りやるべき事を済ませて、戸締りもして部屋を出る直前になって、ふと思い立って再び彼の部屋へ向かった。

本来ならここまでする必要はないのだろうが、これも偶然の巡り合いがもたらした結果だとすれば、ちょっとロマンティックではないか。

彼の部屋の扉をノックするが、やはり彼は外出しているようだ。

今のところ金融業者らしき人物が訪れた形跡もない。

「たった一晩だったけれど、泊めていただいてありがとう」

私は一言呟くと、扉の郵便受けに一通の封筒を忍び込ませた。

こんな形のお礼で喜んでもらえるかどうかは分からないけれども、きっと彼の役に立つ筈。

それに、私にとっては必要のないものだし。

これで、思い残す事は何もなくなった。

予定よりも一日遅れてしまったけれど、私は今日を限りに消え去ってしまうのだ。

私はそのまま、自分自身を永久に消し去ってしまう為に都合のよい場所を求めて、当てもなく街中を彷徨い続けた。

でも、どこへいってどのような手段に及ぼうとしても、いざとなると足が竦んでしまって実行に移せなかった。

このままだと、またしても一人きりの孤独に打ちひしがれる辛い夜を迎えてしまう。

それだけは嫌。

結局、日が暮れるまで私は街中を彷徨い続けて、いつの間にか繁華街の人波に揉まれていた。

そして、見えない糸に手繰り寄せられるようにして、無意識のうちに昨日と同じビルの屋上に辿りついた。

——やっぱり、私が消え去ってしまう場所はここしかないのだろうか。

ビルの屋上から眺める光景は、昨日と些かも変わりがない。

上から足元に広がる夜の町を見下ろすと、階下に蠢く無数の人影は、さながら今日の餌場へ我先にと密集する蟻の集団のようにも見える。

視界を転じて、少し離れたネオンの轟く表通りには、卑しくも浅ましい欲望に飢えた獣達が、生まれ着いての本能の赴くまま、つかの間の悦びを得る為に右往左往しているのだろうか、妖しげに明滅するネオンの光が全てを押し隠していた。

真っ暗な夜の町を彩るネオンの灯りの下で、今日は何人の男と女の喜怒哀楽の即興劇を繰り広げるのだろうか。

夜毎繰り広げられるこれらの光景は、当然昨夜と今夜では演じる役者が入れ替わっているのだろうか、遥か高みから見下ろす限りでは、昨日と全く変わっていない。

しかし、それらの他人事も最早私にとっては何の意味も持たない。

今夜こそ、私は僅かな痕跡も残さずにすっかり消え失せてしまうのだから。

そして、私の見下ろす視線の先に轟く烏合の衆の記憶に留められる事もなく、最初から誕生もせず、存在していなかった事になってしまうのだから。

「今度こそ、さようなら」

私は、大きく深呼吸を一つすると、静かに瞼を閉じて体の重心を手前側に傾けた。

——何バカな事やってるんだ！

瞬間、背後から聞き覚えのある叫び声が響いた気がして、思わず瞼を見開いた私の視線は、高速で接近するアスファルトの地面を捉えていた。

そのまま腰の辺りからいきなり後方に引っ張られると、仰向けのまま頭から屋上の硬い床面に叩きつけられる。

いや、私の背後に何かがしがみ付いていて、転倒の衝撃を和らげていた。

——又邪魔をされた……。

私は瞬時に悟っていた。

何もここまで昨日と同じ展開にならなくてもいいのに……。

私には既に消え去ってしまう選択肢しか残されていないのに……。

しかも、私の決意を引き止めたのは、またしても昨日と同じ彼だった。

なぜ、なぜあなたは、私の決意を二度までも揺るがせるの？

「バカな事は考えちゃダメだって言ったのに、何であんたは他人の話を聞こうとしないんだ？」

彼は、背後から私の腰の辺りをきつく抱き締めながら、喉を押し潰した様な掠れ声で呟いた。

「なぜ？」

「一晩家に泊めてやったからって、あんなお礼を受け取れる訳ないだろ……」

「でも……」

「あんたが何を考えてるか、あれを見た時にはっきり分かったから、今まで探してたんだ……」

私がお礼として彼に贈ったのは、私の銀行口座の通帳と実印、それにキャッシュカードだった。

このまま永遠に消滅してしまう私には最早必要のない物だったけれども、多額の借金を抱えて苦しんでいる彼にとっては、多少なりとも役に立つだろうと思ったから。

私名義の三つの銀行口座の残高を合計すれば、千五百万円近くには達しただろうから、それだけのお金があれば、多少は彼の抱えた負債を補填出来たかもしれない……そう思った。

こういう私の考えを理解できる人は、多分この世の中には余りいないのではないかと思う。

案の定、彼からも『それだけの金があれば、幾らでもやり直しが出来たじゃないか！』と説教をされてしまった。

でも、私にとってはお金なんて何の価値もなかった。

確かにお金があれば生きていく事は出来る。

だったら、ただ毎日孤独の寂しさに打ちひしがれながらも、なお意味のない時間を延々と刻んでいけばいいというの？

私と一緒にいてくれる人もなしに、私一人でどうしろと言うの？

そんな、ただ息をして、食事をして、寝て、寂しさの余り涙に暮れるだけの日々に、一体何の意味があるというの？

どんな価値があるというの？

結局、お金が幾らあったって、私の望むものはこれっぽっちも手に入らないのだから。

それでも、あなたにとってはお金も役に立つでしょう？

「全く、あんたはなんてバカな女なんだ！」

彼は言った。

もしかしたら嗚咽が込み上げていたのかもしれない。

なぜ彼がそれ程感情を高ぶらせているのか、私にはその理由が分からなかった。

「そんなにどうしても行き先がないって言うなら、俺のところへ来るか？」

「えっ？」

「あんたみたいな女は、誰かがちゃんと見張っておかないと、いきなり何を始めるか分からないからな」

「でも……」

「あんたが二度とバカな事を考えないなら話は別だ。でも、このままだと又すぐに同じ事を繰り返しそうだしな。このままあんたを放っておいて、そのまま自殺なんてされた日には寝覚めが悪い」

彼はそう言って、私を半ば強引に彼のアパートへと引っ張っていった。

＊

私はそのまま彼のアパートに住み着いてしまい、それから半年が経った。

彼の抱えた負債は、私の貯蓄を当面彼に貸し付ける形にした事で、かなりの負担が軽減された。

私は全額譲り渡しても構わなかったのだが、彼は断固として受け入れなかった。

また、弁護士を立てて先方と交渉した結果、生活に支障の出る様な不法な取立てからも開放された。

今は、彼も新たな仕事に就き、私もパートタイムながら仕事を始める事で、残された借金の完済を目指して忙しい日々を送っている。

彼が私を強引にここへ連れてきた時、『彼は私に気があるのではないか？』という密かな予感があったのだが、その後彼から具体的な意思表示があった訳ではない。

実のところ、私も未だに、『なぜ彼と一緒に暮らしているのか？』が良く分からない。

これだけの長期間に渡って、それ程広くもない部屋に男女が共に生活していれば、もう少し親密な関係になっても良さそうなものだが、お互いにそう望んでいる訳でもないと思う。

だからといって、それ以外の異性の存在があったとか、異性に興味がないという事とも違う。

彼に、前の奥さんに対して未練があるのか聞いた事もあるが、『苦労をかけた』という負い目はあるものの、恋愛感情はとうに失せているという事だった。

もちろん、互いに独身の男女が自由意志で寝食を共にしているのだから、お互いを嫌いあっている訳ではもちろんない。

私にとっては、双方とも『まんざらでもない』と感じている男女が、体を重ねる事も肌を合わせる事もなく共同生活を送っているという現状が信じ難かった。

私のこれまでの経験が、男女間のプラトニックな関係などあり得ないと結論付けていたからだ。

ただ、実際にそういう状態を続けてみると、肉体的な繋がりがなくても男女関係は成り立つ場合もあると思えてくる。

彼がどう考えているのかは知る由もないが、私は今の状況をかなり気に入っている。

彼は私に優しくしてくれるし、私も出来る限り彼のお役に立ちたいと思っているからだ。

きっと、今の私達にとって当面の課題である、『一刻も早い借金の完済』が成し遂げられない限り、それ以外の事に思いを巡らす精神的な余裕がないのだろう。

とにかく今は一生懸命働いて、一刻も早く金銭的な重荷から開放される為に全力を尽くすのが先決だ。

そして、ついに念願のその時が訪れたら、その時にこそもっと私達がお互いについて真剣に考える心の余裕が出来るのだろう。

(了)

HP【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007【Blankfolder】こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。